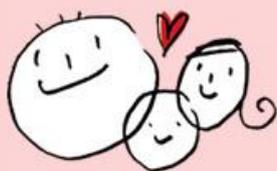


ファザーリング全国フォーラム in やまがた 実施報告書

- ◆日 程 平成28年11月11日(金)・12日(土)
- ◆会 場 山形ビッグウイング(山形市平久保100番地)
- ◆参加人数 延べ2,000人
- ◆内 容 1日目:開会式、6分科会
2日目:6分科会、ワークショップ、メインシンポジウム
- ◆主 催 ファザーリング全国フォーラム in やまがた実行委員会
(NPO法人ファザーリング・ジャパン、山形県、
NPO法人ファザーリング・ジャパン東北、やまがたイグメン共和国
山形市、山形県男女共同参画センター)
- ◆後 援 内閣府、財務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、
日本労働組合総連合会、にっぽん子育て応援団、山形県教育委員会、
山形市教育委員会、山形県連合小学校長会
- ◆協 力 NPO法人コヂカラ・ニッポン、育児情報誌 miku、NPO法人ファザーリング・
ジャパン関西、NPO法人ファザーリング・ジャパン九州
- ◆協 賛 一般財団法人 1more Baby 財団、積水ハウス株式会社、有限会社 HIROKO LIFE
PLANNING、ジェイムズ英会話、株式会社 J T B 東北、株式会社丸吉奥山組、株式会
社渡会電気土木、ヤマリョー株式会社、有限会社佐貞商店



ファザーリング
全国フォーラム in やまがた

とき 11月11日(金)・12日(土) ところ 山形国際交流プラザ(山形ビッグウイング)

開会式

- ◆日時：平成28年11月11日（金）13:00～13:30
- ◆場所：大会議室
- ◆主催：実行委員会

【主催者挨拶】大会実行委員長 安藤 哲也



【開催県挨拶】山形県知事 吉村 美栄子



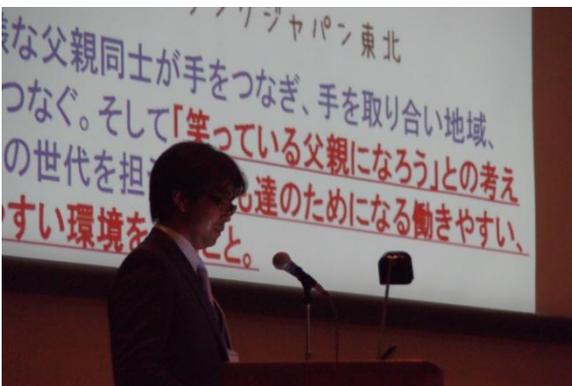
【開催市挨拶】山形市長 佐藤 孝弘



【NPO法人ファザーリング・ジャパン東北の取組み紹介】

NPO法人ファザーリング・ジャパン東北 代表理事 工藤 賢司

- ・FJ東北の設立までの経緯や各県理事の活動、東北でのイクボスの拡大状況などを紹介しました。



〇〇子ども達のために
いま、父親としてできること

NPO法人ファザーリング・ジャパン東北 代表理事
工藤 賢司



分科会1 山形県内優良事例に学ぶ企業のワーク・ライフ・バランス

- ◆日時：平成28年11月11日（金）13:45～15:15
- ◆会場：大会議室
- ◆主催：山形県
- ◆登壇者：



<コーディネーター> 國方 敬司 氏（山形大学人文学部名誉教授）

<事例紹介企業> 山形県ワーク・ライフ・バランス優良企業知事表彰受賞企業

- ・山形航空電子株式会社 総務部長 菊地 暢義 氏
- ・一般財団法人三友堂病院 人事企画課長 中山 隆 氏
- ・株式会社コヤマ 代表取締役 小山 喜代司 氏

【取組み事例紹介】

《山形航空電子株式会社》

- ・社内の状況：社員の平均勤続年数⇒19.3年、過去3年間の新入社員離職者⇒0名
2015年有給取得率⇒70.6%、フレックスタイムの活用⇒2015年利用者79名
- ・労使間で月1回定期的に検討委員会を開催し、働きやすい職場環境に向け情報交換を実施。
- ・育児アシスト制度を導入し扶養する子どもに対しアシスト金を支給。社員からは大変好評。
 - 出産アシスト金 第1子⇒35万円、第2子⇒40万円、第3子⇒45万円を支給
 - 育児アシスト金 3歳までの誕生日に年間10万円を支給
 - 入学アシスト金 小、中、高入学時にそれぞれ30万円を支給
- ・福利厚生の一環として、体育館の無料開放、レクリエーション補助金の運用を実施。

《一般財団法人三友堂病院》

- ・10年程前に看護職員の離職防止と定着が急務となり、看護師確保対策として働きやすさの視点から、「短時間正職員制度」を導入。
- ・週20時間以上の労働時間を確保すれば、勤務パターンは職員が決めることができる。
- ・導入時は賛否両論あったが、導入後は離職率が改善し、現在では看護師の1割相当にあたる16名が短時間勤務職員となり、院全体では36名が制度を利用している。

《株式会社コヤマ》

- ・職場は20～30代の社員、女性社員が多い。妊婦は常に4～5人いる。
- ・育休後の復帰がしやすいよう、育休期間中も社内報を送り会社とつながっている状態としているほか、月に1度赤ちゃんを連れて来社する機会を設け、職場復帰時の疎外感を軽減している。結果育休復帰率は100%。
- ・子どもが職場を訪問する「子ども参観日」は社員のモチベーションアップのつながっており、地域のお祭りに参加するための「お祭り休暇制度」も社員に好評。

【コーディネーター 國方先生の総評】

- ・企業の立場、経営方針などは当然バラバラだが、共通して言えるのは、大事なことは一歩踏み出すということ。ある会社の社長が「変えることは変えてみて失敗したら元に戻せばいい」と言っていた。経営者にとって勇気のいることだが、社員の生活を充実させるため一歩踏み出して欲しい。
- ・社員を大事にする会社は生き延びていくことができる。「お客様第一」という言葉をよく耳にするが、それを実現するためには社員を大事にし、社員が満足していることが必要。
- ・マネできることはマネをする、または自社に合わせてアレンジする。できることからやって欲しい。

分科会 2 パパが考える発達障がい児との関わり方

◆日 時：平成 28 年 11 月 11 日（金）13:45～15:00

◆会 場：中会議室

◆主 催：ファザーリング・ジャパン メインマンプロジェクト

◆登壇者：

【パネリスト】

長崎 郁夫（山形大学教職大学院 教育実践研究科客員教授 山形県立上山高等養護学校 元校長）

伊藤 厚子（山形ひかり学園 児童発達支援管理責任者）

今泉 彰子（山形県立こども医療療育センター 訓練主査兼言語聴覚士）

二宮 佑美（当事者母）

橋 謙太（メインマンプロジェクトリーダー 当事者父）

【コーディネーター】

高祖 常子（理事 NPO 法人児童虐待防止全国ネットワーク理事）

◆実施内容

【概要】

発達障がい児を抱える父親は相談できる相手が少なく悩みがち。そんな父親達と、悩みを共有し、当事者の父親、母親、専門家、はたまた関心のある方々と、県内当事者の保護者から集めた声を元に話し合いをし、こんなやり方があるのでは、と経験や専門的知識から解決策を会場の方と一緒に考えていく。

【当日の内容】

事前に、山形県内の発達障がい児の保護者に、「社会、学校、事業所、自治体、家族等へ」及び「発達障がいをもつ子を育てている父親へ」の 2 種類のメッセージを付箋に書いてもらいました。付箋には、これまで子どもを育ててきた中での、感謝の気持ち、行政等に対する切実なるお願い、我が子に対する不安と期待と希望、父親に対する本音等が綴られていました。



それを元に、「パパが考える発達障がい児との関わり方」をテーマにパネルディスカッションを開催。当事者の親にとっては、我が子に発達障がいがあることによる特有の苦労はあるものの、結局は、父親、祖父母（特に父親の）、地域、友達、学校の理解とサポート、積極的な関わりが必要である、との共通認識が得られた内容となりました。

また、一方で、現在の日本においては、発達障がい児の親に限らないというものの、子どもへの育児、直接の支援への負担は、まだまだ母親に大きいのしかかっています。そして父親の無理解、無関心、誤った判断等により、母親が鬱になったり、子どもの健全な成長にも影響を与えているという問題も生じています。多くの人が出席した会場には、たくさんの当事者の母親も出席しており、分科会后、どのようにしたら父親がもっと、積極的に子供と関わってもらえるのか、といった質問、相談も受け、父親の主体的な関わり的重要性、そしてそのための啓蒙が、本プロジェクトの目的にあることを再認識させられました。

分科会3 どうする？子どものITリテラシー教育～思春期のITトラブルを防ぐには

◆日時：平成28年11月11日（金）13:45～15:15

◆会場：研修室(1)(2)

◆主催：ファザーリング・ジャパン 思春期プロジェクト

◆登壇者：

- ・福井 正樹（NPO 法人 KiRALi 代表理事）
- ・川島 高之（ファザーリング・ジャパン理事）
- ・村上 誠（ファザーリング・ジャパン理事）
- ・斎藤 望（ファザーリング・ジャパン東北理事：青森県）



問題提起（福井氏）『子どもとネット、ITを取り巻く課題とリスク』

スマホを与える時期や各家庭のルール決めは枝葉の問題であり、幹の部分論じる必要がある。

① 思春期のITトラブルとリスクについて

直接リスク：金銭トラブル（課金）、非合法・不適切コンテンツ（ポルノなど）、コミュニケーショントラブル（SNSいじめなど）。間接リスク：オンライン中毒、ソーシャルスキル発達の阻害。

② そもそも子どもにIT端末を持たせる必要があるのか？

子どものITリテラシーは学校の責任ではなく親の責任。母親は過干渉、父親は無関心、放任すぎる。

③ トラブル・リスク防止

保護者がITについて学ぶ。地域ぐるみで関わる。まず安易に子どもにIT機器を持たせない。

ルールは子どもと一緒に作る、罰則は親が決め厳格に守らせ続ける。

パネルディスカッション

【福井氏】子どもの自己管理・責任能力を考えたら、できるだけ大きくなってからスマホを与えた方がよいのでは。現代人はスマホが手放せないネット不安症、大人にも多いがより若年期の方が中毒になりやすい。若者のコミュニケーション能力が低いのはデジタルコミュニケーションの弊害であり、中高生の深夜徘徊が増えるなど新たな問題も発生している。ITリテラシー教育をちゃんと親子で向き合えば良いが、多忙でITを与えておけばよいと勘違いして放任している親が増えている。子どもとの距離感が大事で、乳児期の密接な関係の土台があるから思春期に調整できる。

【川島氏】人として当たり前のことを身に付けさせること、子どもに我慢させるのが教育。若年期に便利な道具を与えてしまうのは、子どもの発達の間ではデメリットの方が大きいのではないかと。これからの人材にITスキルが必要なのは否定しないが読み書きそろばんのようなもの。ITスキルよりも大切なのは人間性や社会性で、ヒューマンスキルや生きる力を育てるにはITや早期教育よりも友達と遊んだりスポーツしたりアナログな体験が重要。ルールは家庭それぞれが良いが、ITだけに限らず何事も親が毅然とした基軸を持って子どもと向き合っているかが大事。

【村上氏】2020年に教育改革。プログラミング教育やタブレット導入といった教育のICT化が始まり、20世紀型スキルが必要とされる。保護・規制からITを活用する教育に変わる。教育も親も変換期にきている。今の子どもたちはデジタルネイティブな時代。デジタルが当たり前にある中でどう子どもを育てるのかのステージに来ている。ITも刃物と同じく道具にも凶器にもなる。危険だと取り上げることは抜本的解決ではない、ITも幼少期から道具としての使い方、可能性を親子で一緒に学べた方がよい。

【斎藤氏】幼少期に培った人間的な能力があってこそ、プログラミング等のスキルが生きるのでは。失敗をさせることも大切な教育。安全な環境でトラブルに対応させることもテーマになると思う。

分科会4 イクボス養成講座～イクボスが変わる部下の働き方～

- ◆日時：平成28年11月11日（金）15:45～17:15
- ◆会場：大会議室
- ◆主催：やまがた企業イクボス同盟（山形県）
- ◆登壇者：



＜基調講演講師及びコーディネーター＞

川島 高之 氏（NPO法人ファザーリング・ジャパン理事）

＜パネリスト＞ 齋藤 士郎 氏（キャド・キャム株式会社代表取締役）

武田 靖子 氏（株式会社ジョインセレモニー常務取締役）

伊賀 久美子氏（株式会社荘内銀行天童中央支店次長）

井上 直哉 氏（やまがたイグメン共和国／株式会社アールビーズ仙台事業所所長）

【川島氏による基調講演】

- ・ワーク・ライフ・バランスは、福利厚生ではなく経営戦略。いつでも、どこでも働ける社員はマイノリティになる。
- ・長時間労働の是正は、部下のためではなくむしろ上司のため。介護離職者は年間10万人いる。大「介護時代」が到来し、ボス自身が介護責任を負う時代になる。家事・育児・地域の丸投げは熟年離婚の原因。長時間労働を是正し、職場以外の居場所を作ることで、「定年退職後やることがない」「熟年離婚」を防ごう。
- ・上司の覚悟が職場を変える。「自分でやる」覚悟、「やらないことを決める」覚悟、「部下に任せる」覚悟など。
- ・WLBを重視するから仕事がおろそかになっていいわけではない。イクボスは成果にもこだわる存在であり、イクボスがいれば業績が下がることはない。

【パネルディスカッション】

《齋藤氏》

- ・社員の家庭の情報を極力手に入れるようにし、家庭環境にあった働き方をいろいろと考えている。社員のWLBをしっかりと考えてあげると、ちゃんと業績として会社に還ってくる。
- ・WLBは規則でガチガチ固めるより、柔軟に進めた方がいいと思う。その方が若い人は先輩のWLBのとり方を見て「次は自分の番」と思うようになり、それが「お互い様」につながっていく。

《武田氏》

- ・「仕事」「生活」「自分」という3本柱を意識している。自分を軸に仕事も生活もどっちも活かして、特に女性には自分を高めていってもらいたい。「働き甲斐」＝「生き甲斐」になれば、年を取るのも楽しくなる。仕事は「生活のため」ではなく「自分の成長のため」と考えてもらいたい。

《伊賀氏》

- ・夫と家事を分担し、子どもにも役割を与えることで仕事と家庭生活の両立ができています。
- ・仕事と家庭生活を両立するのは大変なことだが、仕事の経験が子育てに活かせることもあるし、その逆もある。子育てが仕事の息抜きになることもあるし、その逆もある。女性は可能な限り仕事を続けて欲しい。

《井上氏》

- ・自分が所属している「やまがたイグメン共和国」で5カ条を定めており、その中で「職場でもっと家族の話をしよう」というのがある。「みんなに知ってもらおう」「部下のことを知る」という意味でもっと積極的に話をしていきたい。

分科会5 メリット満載！イクボスのパパ育休取得マネジメントセミナー

◆日時：11月11日（金）15:15～17:15

◆会場：中会議室

◆主催：厚生労働省・FJ夫婦de育休取得プロジェクト

◆登壇者（所属・肩書）：

青山雄一氏（山形労働局 雇用環境・均等室長）、高村 静氏（中央大学大学院戦略経営研究所特任研究員／イクメンプロジェクト推進委員）、宇野寿人氏（山形労働局雇用環境・荘内銀行取締役経営企画部長）、土屋和彦氏（株式会社 ユニバーサル山形 代表取締役）、進藤準一郎氏（荘内銀行経営企画部経営企画グループ）、佐藤千秋氏（山形県立山形盲学校 教諭）



全体司会：高祖常子（FJ 理事）／ファシリテーター：塚越 学

◆実施内容：

- ・開会の挨拶 夫婦de育休取得戦略プロジェクトの紹介：高祖常子（FJ 理事）
- ・山形の男性育休の現状（青山氏）青山氏より山形県の男性育休取得の現状とその背景を説明。
- ・イクボスのパパ育休取得マネジメントセミナー（高村氏）

- ・ 動画資料の上映
- ・ 管理職向けセミナー（会場を巻き込みながらセミナーを体験）

厚労省が作成した管理職向け男性の育休取得推進セミナーを参加者が体験。講師の高村氏が参加者を巻き込みながらセミナーを行った。

- ・ パネルディスカッション

塚越 FJ 理事のファシリテーションに沿って、以下の内容でパネルディスカッションを行った。

① 自己紹介（一人2分×5）

- ・ 育休にまつわるお話を織り交ぜながら自己紹介。

② セミナーの感想

上司の立場から（宇野氏、土屋氏）

- ・ 男性の育休取得が当たり前になるために必要なことが盛り込まれていた。
- ・ 非常に良くできていた。ぜひ職場で使ってみたいと感じた。

部下の立場から（進藤氏、佐藤氏）

- ・ なんのために取るのか、どうして男性も取るのかをわかりやすくまとめられた。
- ・ 上司の立場から見た育休を知ることができ新鮮だった。

③ 育休取得について

上司

宇野氏：仕事の状況を把握しておくことが大切。育休から戻ってきた人がどこの部署に戻るかが課題。

制度だけでは限界がある。まずは取得することが必要。

土屋氏：制度としての柔軟性や雇用の安定、待遇改善が必要。介護という特殊な領域では人材の確保が難しい。

進藤氏：上司から声をかけてもらうまで取得しよう思っていなかった。

子供達が大きくなる頃には男性の育休取得が当たり前になってほしい。

佐藤氏：育休を取得することで単位時間当たりの生産性を上げることができた。障がい者、健常者関係なく、ママのニーズは同じ。なので、みんなが取ることが普通になることが必要。



分科会 6 震災を経験したからできること ～東北から熊本へ、そして未来へ」

◆日 時：平成 28 年 11 月 11 日（金）15:45～17:15

◆会 場：研修室(1)(2)

◆主 催：ファザーリング・ジャパン メンズ PTA プロジェクト

◆登壇者：

- ・福井正樹（NPO 法人 KiRALi 代表理事）・村上誠（ファザーリング・ジャパン理事）
- ・工藤賢司（ファザーリング・ジャパン東北代表理事）・村上吉宣（全国父子家庭支援ネットワーク 代表理事）
- ・本田悦也（山辺町立大寺小学校 PTA 会長・山辺町 PTA 連合会副会長）



前半： 『東北の今。東日本大震災を経験して。』

【挨拶：村上誠氏】 PTA や自治会などに関わり、自分の子どもだけではなく地域の子どもたちを育む父親を増やすことが大事。東日本大震災から 5、6 年が経過し、児童も PTA も入れ替わっていくなか、震災の体験や防災活動を風化させず、持続、継承していくにはどうしたらいいか考えたい。

東日本大震災の体験とその後の生活・活動についてリレートーク

【工藤氏】 震災時は PTA 会長だったが地域のルールでの縛りで避難所の開設に関われなかった。PTA がハブになり子どもたちと地域住民、各世代を繋げるコーディネーターになる。

【村上吉宣氏】 震災時は地域の友人やネットでの繋がりに支えられた。震災後、ひとり親になった親も多い。家庭や地域との関わりが希薄な男性が一人親になると縁が全くなく孤立しがち。責任者行方不明の避難所も多く、生存者から急きよ体制を作る必要があり、事前から認識のある人同士がコアとなって乗り越えた。普段の私生活で地域と関わりを持つことが災害時にも生きてくる。

【本田氏】 震災後すぐ、他の地域へ炊き出しや支援活動を行った。歴史のある小さな学校で、児童も保護者も繋がりが深い。今年ようやく学内に地域の防災倉庫ができたが、管轄は PTA ではない。山形は震災の影響は少なかったが活断層も多数あり、防災訓練に関して意識が低いのが課題。

後半： 『そして未来へ。次世代を守るために大人たちや地域ができること。』

子どもを取り巻く危険・トラブル～子どもを地域で守るには（福井氏）

最大の解決策は地域力の強化。PTA の親同士だけでなく、さらに地域で多世代で繋がる必要あり。地域力は挨拶から。挨拶しない地域は防犯力も弱い。地域の課題、危険箇所、ニーズのある住民などを頻繁に把握しておく。

地域で子どもたちを守るにはどうしたらよいか

【福井氏】 都心部と地方で、父親と母親のコミットが異なる。PTA は活動の主体になるより、地域の他の組織とのハブになる。コミュニティとプライバシーのはざまを埋めることが必要。

【工藤氏】 子どもたちが見守られている実感を持てるように。地域のイベントに子どもたちを絡める仕掛け、場づくり。土日のイベントに学校や先生を巻き込む施策が必要。親が率先してコミュニティに関わらないと、子どもも地域で生きている実感が育まれない。

【村上吉宣氏】 孤立している親は、そもそも自治会・子ども会などと繋がるにも地域の情報が分からない。地域の窓口があるとよい。一人親は地域活動に関わっていない負い目もある。上手に他人の手を借りながら生きること、隣人は悪い人ではないと子どもに伝えたい。

【本田氏】自分が子どもの頃、近所の人に叱られたり声を掛けられた。地域に高齢者はいるが外に出てこない。どのように引っ張り出すかが課題。

【村上誠氏】 学区と自治会のエリアが異なる地域も多くて連携が課題。ママ友ネットワークにパパがどう入っているか。男性社会における女性活躍の壁と同じ構図。昼間は地域に大人が不在がちで、子どもと高齢者ばかりなので、世代間を繋げるのがセーフティネットの強化になる。

分科会7 イクボス首長サミット

◆日時：平成28年11月12日（土）10:00～12:00

◆会場：大会議室

◆主催：NPO法人ファザーリング・ジャパン

◆登壇者：山形県知事 吉村 美栄子氏、広島県知事 湯崎 英彦氏、山形市長 佐藤 孝弘氏、
湖南市長 谷畑 英吾氏、日南市長 崎田 恭平氏、南陽市長 白岩 孝夫氏、
桑名市長 伊藤 徳宇氏

コーディネーター 安藤 哲也（NPO法人ファザーリング・ジャパン代表理事）

◆内容

全国の行政機関において「イクボス宣言」が活発化する中、「イクボス首長サミット」を開催。

最初に山形県 吉村 美栄子知事より、山形イクボス企業同盟の取組など、山形県の取組を紹介。

・広島県知事 湯崎 英彦氏：情報通信技術の活用により、庁舎外でも仕事ができる制度の導入や、男性従業員の育児休業などを取得した中小企業に対して奨励金を支給。

桑名市長 伊藤 徳宇氏：課内で年休取得計画を作成して情報共有を図り、休暇を取得しやすい雰囲気を作り出した。市長・副市長が庁内を見回り、退庁指導をしている。

・湖南市長 谷畑 英吾氏：全管理職がイクボス宣言。半年ごとに成果をチェック。残業が削減されるなどの成果がでている。

・日南市長 崎田 恭平氏：市内の警察など11の組織と一緒にイクボス宣言。夕方から帰る「ゆうぱば運動」の推進や、企業と組んだ「夫婦円満都市」推進プロジェクトの紹介。

・山形市長 佐藤 孝弘氏：イクボスは、マネジメント能力の向上、経営改革、生産性の向上につながる。また、上司も含め面談するなど男性が育休を取得しやすい環境を作る取り組みをしている。

・南陽市長 白岩 孝夫氏：イクボスの取組はこれから。まずは育児休業100%を目指す。制度を知らないのが問題なので案内を配った結果、100%の取得につながった。

その後今後、地方行政にとって必要なワークライフバランスの施策や「イクボスの役割」などについて議論。

ただ早く帰るだけでなく生産性を上げて成果を出す。そのためにも長時間労働を評価する昔の意識を変える必要がある。また、役所も企業も自分たちだけでなく、市民を巻き込み理解してもらうことが重要。



最後は下記「共同宣言」を採択。

●私たちは、ワーク・ライフ・バランスを推進するイクボスとして、次の事項に真剣に取り組み、男女が共に活躍できる社会の実現を目指すことをここに宣言します。

- 1 自らが率先して仕事と家庭生活の両立を実践します。
- 2 職員の長時間労働の是正、男性職員の家事・育児・介護への参画促進、女性も男性も能力を十分に発揮できる環境づくりなどに取り組みます。
- 3 職場の活性化、業務の効率化で組織力を高め、住民サービスの向上に努めます。
- 4 持続可能で活力ある地域社会を維持していくため、あらゆる分野における女性の活躍を推進します。
- 5 イクボスの輪を広げることにより、誰もが仕事も家庭生活も地域活動も大切にできる社会を実現し、地域の活性化と地方創生につなげていきます。

分科会 8 地域と学校の連携・協働の推進～「地域デビュー」して子どもたちの成長を支えよう～

◆日 時：平成 28 年 11 月 12 日（土）10:00～12:00

◆会 場：中会議室

◆主 催：文部科学省

◆登壇者：渡辺 栄二（文部科学省 生涯学習政策局 社会教育課 地域・学校支援推進室長）、佐藤 雅彦氏（新庄市立北辰小学校）、齋藤 秀志氏（やまがたメイカーズネットワーク）、山本 昭一氏（NPO 法人日本交流分析協会 TA 学校教育心の開発研究所 所長）、金子 達也氏（独立行政法人製品評価技術基盤機構 製品安全センター 製品安全企画課）、麻生 賢一氏（山形信用金庫 業務部業務課 主任調査役）

◆実施内容：

■第一部

1) 活動紹介

①「地域全体で子供たちの成長を支え、地域を創生する『地域学校協働活動』について」（渡辺 栄二）

- ・幅広い地域住民等が参画して地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、学校を核とした地域づくりを目指して、地域と学校が連携・協働して行う活動「地域学校協働活動」について
- ・保護者と連携・協働した地域学校協働活動の事例、地域コーディネーターの紹介



2) 事例紹介

②「広がれ けやきの森プロジェクト」（佐藤 雅彦氏）

- ・地域の様々な方が繋がって子ども達を支える「学校応援団」
- ・けやきの森プロジェクト、元気創出プロジェクトの取組

③「地域と学校が連携・協働して学習活動を行っている山形県の事例紹介」（齋藤 秀志氏）

- ・「地産地消」手作り 3D プリンターを学校教育へ導入・活用
- ・絆づくりと活力あるコミュニティの形成、自立・協働型の地域社会の構築

■第二部

1) プログラム紹介「山形県で活動できる土曜学習応援団※プログラム体験」

※平成 26 年 4 月から開始した子供の豊かな学びを支えるために、多様な企業・団体・大学等が土曜日、夏休み、冬休み、平日の授業や放課後等の教育活動に出前授業の講師や施設受け入れ等により特色・魅力ある教育活動を推進する活動。

④「基本的な自尊感情を育てるワーク～自分の良さに気づき、言葉で表現できる～」（山本 昭一氏）

交流分析の「自我状態の」理解を通して、自分が学校や家庭で使っている「心のエネルギー」を知り、自分の心が見えるようになり、自尊感情を醸成する教育プログラム

⑤「くらしの中の身近な製品事故（小学校高学年向け）」（金子 達也氏）

製品安全教育DVDハンドブックを活用して、これまでに実際に発生した事故を取り上げ製品を安全に使用するために気をつけるための教育プログラム

⑥「しんきんマネースクール『考えようお金の大切さ』」（麻生 賢一氏）

お金の役割（お金の流れ、お金がないとどうなるのか？）信用金庫・銀行の役割（預けると借りる、信用金庫がないとどうなる？）など、お金の大切さを学ぶ出張プログラム

2) 情報交換会

各プログラムにブースを設け、情報交換

分科会 9 国も世帯の家計も、未来まで見渡そう ～子育てにやさしい社会保障制度へ～

◆日 時：平成 28 年 11 月 11 日（土）10:00～12:00

◆会 場：研修室(1)(2)

◆主 催：財務省

◆登壇者：林田 香織（ファザーリング・ジャパン理事、ロジカル・ペアレンティング LLP 代表）、塚越 学（ファザーリング・ジャパン理事、公認会計士）、

三浦 真守（有限会社 HIROKO LIFE PLANNING 営業統括部長）、岡本 直之（財務省大臣官房審議官）



◆実施内容

【全体の進行】

冒頭、FJ 理事の林田氏から、FJ と財務省のこれまでの取組みについて紹介。次に、財務省審議官の岡本氏が、少子高齢化を踏まえた社会保障の現状と日本の財政及び国際比較、将来世代への資源配分を実現するための成長戦略について講演。続いて、地元在住ファイナンシャルプランナーの三浦氏による、給与明細の見方を切り口とした、意外に知られていない保険料の支払額や税金による支援の現状についての説明の後、FJ 理事の塚越氏によるファシリテーションの下、登壇者と参加者との質疑応答を実施。

【林田氏の説明概要】

・FJ と財務省が連携したロールモデルカフェでは、仕事と育児の両立方法や、職場でどのように子育てへの理解を得るかをテーマとした意見交換、子育て支援にどのように税金が使われているかについての説明等を行った。・参加者からは、子育てに意外と税金が使われていることがわかったとの意見や、手厚い支援がありがたい一方、国の借金問題も気になるとの意見などが寄せられた。

【岡本氏の説明概要】

・日本の人口比率は高齢化の一途を辿っているが、年齢別に給付と負担を見ると、医療費や介護費、年金に起因する高齢者世代の給付が多く、社会保障費増大の要因となっている。・消費税増収分は、全額が社会保障に充てられることになるが、それだけでは到底追いつかず、現状は給付と負担のバランスを欠いていると言わざるを得ない。・国の債務約 1,200 兆円に対し、家計金融総資産は約 1,700 兆円あるが、高齢化により家計貯蓄率は減少しており、デッドクロスの時期は確実に迫っていると考えられる。・財政破綻を回避するためには、AI やロボット、自動走行を始めとするイノベーション、テクノロジーを使いこなす人の教育の充実によって経済成長を達成し、税収を増やさなければならない。

【三浦氏の説明概要】

・行政や企業、自治体の支援によって「既に準備してあるもの」に目を向けることにより、過剰な民間の保険、共済、団体保険などに加入しなくて済む可能性がある、もしくは効率的に加入することでより効果的になる。・将来のお金の動きをイメージすることにより、より効率的な自助が行えるようになる。・世帯年収が同一であっても、片働きと共働きでは、各種年金受給額や高額療養費の負担額において、共働きに有利な点が多い。

【参加者からの意見・質問等】

・介護と予算の問題については、金銭だけで解決できるものではなく、高齢者になってからの生き方に対する考えを変えてゆく必要があるのではないかと。現実問題として、岡本審議官の講演のシナリオ通りにいく見通しがどの程度あるのか本音を伺いたい。・3 歳の子供、70 歳の両親と同居しているため、社会保障制度やダブルケアについて非常に意識している。先日、財務省が今後 10 年かけて 4 万 9,000 人の教員を削減するとの計画が報道されたが、社会保障の維持に資するのであれば両親にとっては朗報かもしれない反面、子供のことを考えると、少し強引なのではないかと思う。

分科会 10 これからの子ども教育」～偏差値だけで、いいのですか？

◆日 時：平成 28 年 11 月 11 日（土）13:00～14:30

◆会 場：大会議室

◆主 催：NPO 法人 コヂカラ・ニッポン

◆登壇者



【事例発表会】

「地域活性化×子ども教育」@船橋：中原久子（コヂカラ・ニッポン副代表）、GoGoGohan×HIROTA コヂカラプロジェクト：林田健太（プロジェクトメンバー）、人口増大計画～Back to the 増えっちゃん～：山形市立商業高等学校「産業調査部」（通称＝産調ガールズ）、子供たちの力で地方を元気に！美郷中学校コヂカラ×美郷雪華アロマミスト：奥真由美（コヂカラ秋田、一般社団法人 Sail On Japan 代表理事）

【パネルディスカッション】

パネラー

武田岳彦氏（元山形県 PTA 連合会会長、元日本 PTA 全国協議会会長）、奥真由美（コヂカラ秋田、一般社団法人 Sail On Japan 代表理事）、林田香織（コヂカラ・ニッポン理事）

モデレータ

川島高之（コヂカラ・ニッポン代表）



◆実施内容

【事例発表会】

全国で行われている実践事例の発表を行いました。

・「地域活性化×子ども教育」@船橋

小学生 8 名が自身の行っている活動をメンバー全員で発表しました。メンバーは発表当日の朝に、新幹線で山形へ移動。メンバー全員が大人の前で発表をしましたが、その小学生とは思えない発表は、船橋コヂカラの底力を感じました。

・GoGoGohan×HIROTA コヂカラプロジェクト

当時小学生でプロジェクトメンバーであり、現在高校生のメンバーが一から自分で作成したプレゼン資料を発表しました。高校生が一人で大人たちの前で堂々と発表する姿は、小学生のときの活動が、今現在も役立っていることを感じさせました。

・人口増大計画～Back to the 増えっちゃん～：山形市立商業高等学校「産業調査部」

山形市立商業高等学校「産業調査部」（通称＝産調ガールズ）による発表では、舞台両側に分かれた学生達が阿吽の呼吸で順番に発表していき、自分たちの仮説・調査結果・見解などをわかりやすく説明してくれました。プレゼン資料ともに学生たちの伝わりやすい話し方は、参加者一同が驚き、プレゼンテーション力の高さを実感しました。

・美郷中学校コヂカラ

「子供たちの力で地方を元気に！美郷中学校コヂカラ×美郷雪華アロマミストプロジェクト」の紹介では、美郷雪華アロマミストの商品化までの活動が報告されました。美郷中学校学校祭で販売した際には、商品が即完売と報告は大反響を得ておりました。

【パネルディスカッション】

パネルディスカッションでは、元日本 PTA 全国協議会会長の武田岳彦氏と事例発表の活動を担当するコヂカラ・ニッポンのメンバーが、「これからの子ども教育」について意見を交換を行いました。武田氏からは、発表の各実践について応援のメッセージをいただきました。そして、本気のキャリア教育が今後重要になってくるのが、パネラーからの共通の意見となりました。

分科会 11 “1時だよ！全員集合！！ワールドカフェ やまがたイグメン共和国バージョン”

◆日 時：平成 28 年 11 月 12 日（土）13:00～14:30

◆場 所：中会議室

◆主 催：やまがたイグメン共和国

◆登壇者

大友まさみ（フリーアナウンサー）

五十嵐健裕（やまがたイグメン共和国大統領、FJ 東北理事、山形県職員）



◆実施内容

【趣旨・目的】

- ・全国フォーラムの 2 日目午後までに、参加者は各分科会でたくさんの学びをインプット
⇒当分科会でアウトプットの場づくりを行う。
- ・ワールドカフェを通して全国からの参加者同士の交流を図る（特に昼の部のみの参加者）。

【内容】

①趣旨・ルール説明（5分）

- ・テーブルに座った方は仮装義務あり（テーブルに予め仮装グッズを配布）。
- ・テーマは「習い事」「休日の過ごし方」「地域での子育てしやすさ、課題」の 3 つ。
各自行きたいテーマに参加（参加者数を確認し、3 テーマ×2 グループを設定）

②アイスブレイク（5分）

自己紹介カード作成（出身地、氏名、家族構成）、グループごとに自己紹介

③ワールドカフェ（60分）

20分を1区切りとし、1人（やまがたイグメン共和国メンバー）を残して、グループをシャッフル。共和国メンバーは前回の議論を新メンバーにフィードバック（20分×3回）

④振り返り・感想（20分）

【各テーマの主な内容】

「習い事」

- （多いもの）スイミング、英会話、ピアノ（音感は9歳まで）、公文（親子の話合いで目標設定）
- ・親からの押しつけも少しは必要、自分の夢は押し付けない
- ・子供の希望優先、子供自身の要求がまだない

「休日の過ごし方（小学生まで）」 ※季節・屋内外別

- ・春：近所の公園、ゲーム、ドロボウ将棋、回り将棋 ・夏：キャンプ（釣り⇒料理）
- ・秋：マルシェ、子供会、親子で卓球 ・冬：スキー、ソリ遊び、かまくら作り、
一緒に雪かき、トランプ（通年）スポ小、土日出勤のため祖父母頼み

「地域での子育ての良いところ、課題」

<良いところ>

- （父親）パパグループの読み聞かせがある
- （地域）3世代同居（ママが働きやすい）、世話焼きおばさんがいる
- （学校）PTA・子供会の役員をすると地域全体がわかる

<課題>

- （父親）自分のことを語らない、パパ同士が繋がらない、
- （地域）声がけしにくい、地域全体の子育てがしにくくなっている
- （学校）PTA・子供会の役員をすると地域がわかる



分科会 12 二人で叶えるライフとキャリア イマドキ夫婦のための家族力 UP!ワークショップ

◆日時：平成 28 年 11 月 12 日（土）13:00～14:30

◆会場：研修室(1)(2)

◆主催：内閣府、NPO 法人ファザーリング・ジャパン東北

◆登壇者：

ワークショップ：三木有智氏（NPO 法人・tadaima 代表）

パネルディスカッション：三木有智氏（NPO 法人・tadaima 代表）

：小野卓也氏（長岡市草岡・洞松寺住職）

：大場友美氏（地域包括支援センター・社会福祉士）

ファシリテーター：工藤賢司（NPO 法人ファザーリング・ジャパン東北共同代表理事）

◆実施内容

初めに内閣府男女共同参画局 総務課 政策企画調査官 秋元よりご挨拶。

ワークショップで利用する「夫婦が本音で話せる魔法のシート ○○家作戦会議」の誕生秘話。

同シートを監修したワークショップ講師である、三木氏について簡単な紹介があった。

続いて、ワークショップ開始。

司会者より講師の紹介、4人1グループになりアイスブレイクタイム（自己紹介）

その後、実際にシートを使いながら、グループでディスカッション行った。

通常、このワークを使用する際は夫婦でお互いに結果を見合う、ディスカッションを行うが今回、参加者全員が単身での参加だったため、自分たちの記入した結果をシェアするという形になった。

中でもシートの PART. 3「家のこと」のシェアの仕方を考えようでは、夫・妻の関わる家事・育児について理想の割合を書き込んだ。実際にどのくらい家族にとって重要だと思う家事を 10 項目書き出してもらい、現在の分担割合について記入。その後、書き出した家事の中で、自分が負担に感じている、相手に助けてほしい箇所にマークをつけた。ディスカッションでは「理想と現実があまりに違う」「意外とやっていた」「細かく考えると重要な家事は 10 項目以上あり、家事の多さに驚いた」という声が出た。

ワーク終了後「帰宅したら、夫婦でやってみたい」「結婚する前にパートナーと話し合うことによって、より理想の夫婦になることができるのではないか」など、好評だった。

続いてパネルディスカッションでは、ワークショップで講師を務めた三木氏、寺院住職の小野氏、社会福祉士の大場知美氏。そして FJ 東北の工藤共同代表理事がファシリテーターとなり、現在の家族状況、夫婦のあり方についてのディスカッションが行われた。

小野氏は、奥様が単身赴任というご家庭内の役割について「実母（小野氏）が食事関係を行っているので助かる。妻は、赴任先から帰ってくる週末担当。実母と妻の間（嫁姑）に入って、架け橋をするのも自分の大事な仕事」と話した。また、夫婦で毎晩 1 時間電話していると話し、離れていてもコミュニケーションの大切さを伝えた。

三世代同居率が全国第 1 位の山形県で、4 世代同居を行っている大場さんは途中、会場内を撮影にきた旦那様がいる前で「けっこう好きにさせてもらっています」と話し、会場内を笑いへ誘った。「子育ても家族みんなでしている」と四世代同居のメリットについても触れた。

最後にファシリテーターである工藤氏から「ワークショップで利用したシートを活用するなど、ご夫婦で、ご家族でどうやったら忙しい毎日を楽しく。また夫婦でキャリアを叶えることができるのか、話し合う機会を設ける」ことの大切さをお伝えし、終了した。

アンケート回収時、参加者全員から「ワークショップ時に使用したシートが欲しい」と言われ、皆さん数枚お持ち帰りしていかれた。



メインシンポジウム イグメン・イクボスが拓く笑顔に満ちた社会～少子化社会克服のために～

◆日時：平成28年11月12日（土）15:00～16:30

◆会場：大会議室

◆主催：NPO法人ファザーリング・ジャパン、山形県

◆登壇者：

<基調講演講師> 白河 桃子 氏（少子化ジャーナリスト／相模女子大学客員教授）

<フリートーク> 白河 桃子 氏

安藤 哲也（NPO法人ファザーリング・ジャパン代表理事）

飛塚 典子（山形県子育て推進部長）

【白河氏による基調講演】

- ・少子高齢化と人口減少によって、深刻な労働力不足が発生。これまで働いていなかった層「女性」「高齢者」「外国人」を労働力として確保する必要がある。⇒働き方が多様化するため、それをマネジメントできる「イクボス」が必要！
- ・夫の休日の家事・育児時間別に第2子出生状況を見ると、「家事・育児時間なし」が出生率10%に対して、「6時間以上」の場合は出生率67%。
⇒少子化対策にはイクメンが必要！
- ・出生率を回復させたスウェーデン、フランス、ドイツ、イギリスでは、父親の育児が「国の競争力や子どもより良い発達に関わる問題」として議論され、男女が均等に育児をするようなメッセージや政策が出されている。
- ・負のサイクルで回っている「少子化」「女性活躍」などの問題は、長時間労働に上限を設けることで、正のサイクルで回りはじめる。



【フリートーク】

《飛塚部長》

- ・山形県は、進学や就職で若い世代が県外に流出してしまうことが大きな問題で、いかにして県内に戻すかが課題と考えている。山形で生み育てる環境・ライフスタイルを定着させることが重要と考えるがご助言を。

《白河氏》

- ・山形は結構「イクメン県」だと思うが、女性が足りない。女性の県外流出が問題だと思っており、流出の原因は安定した両立できる仕事があるかないか。女性の雇用を増やして、長時間ではなくても楽しく働ける環境が大切。

《安藤代表》

- ・山形を出た人が戻りたくなくなる売り出し方が大事。「子育て王国日本一」はどこの都道府県も言っているが、例えば「働き方王国日本一」「女性の雇用日本一」「イクボス推進県」といった売り出し方をすれば山形に帰ってみようかとなるのでは。



《飛塚部長》

- ・若い女性の県外流出は大きな課題で、男女と一緒に山形で生み育てるという教育が重要を考えており、白河先生のご協力で高校生を中心としたライフデザインセミナーを開催している。
- ・仕事の面では、イクボスの取組みは大変重要。昨年「やまがた企業イクボス同盟」を設立し、経営者トップの意識を変えることで、ワーク・ライフ・バランス改善などの意識啓発が出来た。

《安藤代表》

- ・山形のイクボス同盟の企業数は全国でトップだが、これまでの例では宣言倒れしている経営者もいるので、イクボス宣言がゴールになってはだめ。イクボスは抗生物質ではなく漢方薬なので、毎日決まった時間に飲み続けて、半年後に体質が変わったと思えるようなもの。同盟倒れにならないように。



《飛塚部長》

- ・山形には「やまがた企業イクボス同盟」のほかに「山形いきいき子育て応援企業」の認定制度もある。イクボス宣言だけでなく、実際の取組みに結び付けて認定企業に移行していくことが大事。

《安藤代表》

- ・モデルケースの可視化が必要だと思っており、中小企業の取組みなどデータを集めて冊子にし、県内企業に配るなどの取組みが今後山形には必要。

《白河氏》

- ・見えやすいものから取組んだ方がいい。例えば、「有休を確実に取らせる」「1週間でも育休を取らせる」など。休みに慣れることが大切。
- ・育休100%企業は東京に結構あるが、ほとんどが1週間以内の育休。それでも取る意味はある。「育休100%企業、100社」を目指すなど、分かりやすくメッセージ性が強いものに取り組んで欲しい。



《飛塚部長》

- ・仕事だけではなく生活も含めて山形はいい所だという宣伝をしたうえで、山形に戻ってきてもらうことが必要だと思っている。仕事の面では両立支援、生活の面では豊かな自然の中での子育て、そういった魅力を都会と比べてもらうような仕組みが必要だと考えている。

交流サロン 「手づくりおもちゃ」が育む親子のコミュニケーション

◆日時：平成28年11月12日（土）10:30～12:00

◆会場：交流サロン

◆主催：ファザーリング・ジャパン東北

◆登壇者：齊藤 望（ファザーリング・ジャパン東北 理事／日本グッド・トイ委員会公認 おもちゃインストラクター）

◆実施内容

【「手づくりおもちゃ」が育む親子のコミュニケーション】

- ・本来子どもたちが持っている「自由に遊ぶ力」や「遊びをつくり出す力」を大切にすること。
- ・おもちゃインストラクターは『遊びの実践と心構え5ヶ条』を実践している。
 1. 楽しくなければ遊びじゃないよ！
 2. 一を知ったら十に膨らませよう！
 3. 遊びの主役は子ども！
 4. 体験する過程を大切にしよう！
 5. 創造性やユニークな考え方を尊重しよう！



【第一部】五感で楽しむ『おがくず粘土のキーホルダー』づくり

- ・鉛筆の削りかすで出来た地球にやさしい「おがくず粘土」を使ったキーホルダーを作成した。
- ・6組の親子、おもちゃ遊びを学びに来たという子育て支援団体の方など計14名が参加し、かわいい動物や昆虫の型に粘土を詰め、乾燥させてキーホルダーを完成させた。
- ・子どもたちとパパやママがコミュニケーションをとりながら、難しい部分を一緒に作っていた。
- ・参加者した子どもたちからは「鉛筆のいい匂いがする」、「ランドセルに付ける」、パパやママからは「こんな粘土があるんですね」、「環境教育にもつながりますね」などの感想をいただいた。

【第二部】新聞紙で手作りおもちゃを作って遊んじゃおう！

- ・自宅にある新聞紙や紙皿を使って、コミュニケーション・トイ（コミュニケーションを促進するおもちゃ）を作成した。
- ・第一部と同様に14名が参加し、親子で協力してフリスビーを完成させた。
- ・出来あがったフリスビーを会場内で飛ばしたり、親子でキャッチボールする光景が広がった。
- ・フリスビーと新聞紙で作った棒を使って、親子で協力しながら皿回しにも挑戦していた。
- ・参加者した子どもたちからは「いっぱい飛んだよ」、「天井まで付きそうだったよ」、パパやママからは「発想力ですね〜」、「お金をかけないでいろんな遊びができるんですね」、などの感想をいただいた。



閉会式

- ◆日 時：平成 28 年 11 月 12 日（土）16:30～16:45
- ◆場 所：大会議室
- ◆主 催：山形県、NPO法人ファザーリング・ジャパン

【総括】総括では、F J 安藤代表と F J 小崎顧問が F J 設立からの 10 年を振り返りました。



【大会旗引き継ぎ】山形県の飛塚子育て推進部長から次回開催地大分県の飯田福祉保健部審議監へ大会旗が引き継がれ、広瀬勝貞大分県知事のメッセージが紹介されました。



【閉会宣言】最後は、安藤大会実行委員長の閉会宣言で山形大会は幕を閉じました。



出展ブース

◆日 時：平成 28 年 11 月 11 日（金）、12 日（土）

◆場 所：交流サロン

国の機関や協賛企業などによりパネル展示等を実施

【参加団体】

一般財団法人 1more Baby 財団	積水ハウス株式会社	有限会社 HIROKO LIFE PLANNING
内閣府	財務省	文部科学省
厚生労働省	NPO 法人コチカラ・ニッポン	やまがたイグメン共和国
NPO 法人 ファザーリング・ジャパン東北	NPO 法人 ファザーリング・ジャパン	山形県



1more Baby 財団



積水ハウス



HIROKO LIFE PLANNING



厚生労働省



やまがたイグメン共和国



山形県



三世代家族写真・エピソードコンテスト
パネル展示（山形県）



絵本ライブも開催



ペロリンは子供たちに大人気♪



コチカラニッポンの子どもたちによる
駄菓子の販売



バルーンアートのプレゼント



佐貞商店「段ブロック」のプレゼント